

## メディアの死滅と再生

——グローバル、ナショナル、ローカル、そしてアイデンティティ——



パネラー 黒田 勇  
水越 伸  
北村日出夫  
司会 岡田 朋之

2001年12月13日(木)  
15:00~18:30  
同志社大学明德館1号教室

### 開会あいさつ

森川：今回のシンポジウムは、通常の社会学会講演会と同じ形態をとっておりますが、私どもとしては、多少の思い入れがございます。ここにおられる北村日出夫先生ですが、今年度でご退職されます。つい昨日、北村先生の履歴書を拝見していましたら、1965年に同志社大学に赴任されております。ですから、37年間同志社で教鞭をとっておられたわけです。新学期早々北村先生に「退職記念講演なんのを、どうしましょうか」とお尋ねしましたら、「私はそんなおじんくさいのは嫌や、面白いのを集めて、いろいろ喋るほうが楽しそうだから、それをやりたい」とのお答えでした。それで、今日、関西大学の黒田先生、東京大学の水越先生、司会をお願いいたします関西大学の岡田先生の御三方にお越しいただいております。今日のシンポジウムは間違いなく面白くためになる、大変いいシンポジウムになると思いますが、そうでなかったら北村先生の責任ということもあるかな、と思います。それでは司会を岡田先生のほうにお渡しいたします。よろしくをお願いいたします。

岡田：今回は雇われ司会者と言っては失礼ですが、まったくよくわからないままこの席に座っている状況なんです。一応テーマとしまして、「メディアの死滅と再生 グローバル、ナショナル、ローカル、そしてアイデンティティ」とつけられております。主旨をうかがったところ、ここでは20世紀のメディアの死滅と再生という意味合いが込められているということです。それにキーワードとして、グローバル、ナショナル、ローカル、アイデンティティというものが含まれているそうです。

北村先生が同志社大学に着任されたのが1965年であったということを考えますと、それは私が生まれた年でもあるんですけど、そこに我々のライフヒストリーと、北村先生自身の研究者としてのヒストリー、そのあいだのメディアの展開という見方から筋道をつけていくことができるかと思えます。

まず、関西大学の黒田先生から、ナショナルなメディアの生成と死滅ということについてお話しをいただきたいと思います。それに続いて、東京大学情報学科の水越先生からメディア・ピオトープという視角からお話しいただき、その後、北村先生にご自身の研究経緯を振り返りながらお話していただきます。

## ナショナルメディアとしての放送の発展と“衰退”

——“日本人”という“わたしたち”の形成と拡散をとおして——

黒田 勇



黒田：今、岡田さんの方からお話がありましたテーマですけど、尾嶋先生と私がテーマを考えようやないかということで、飲み屋で酒の勢いでできました。必死に考えてきてこういう結果になるんですけど、予定通りにテーマに沿ってナショナルというものはどうやってできたのか、それを考えていこうと思います。

ナショナルとは別のコミュニケーションの可能性、公共圏、あるいはフォーラムということ放送がつくってこなかったか、その結果をさあどうするという話を水越先生がされるといいますので、私は、いかに「日本という私たち」がつくられてきたのかという回顧談的な話をしようと思います。

実はこの6月に同志社で開かれたマスコミ学会で、1959年の皇太子の結婚パレードと、東京オリンピックを例にして、20世紀のメディアを振り返るというワークショップをやったんですけど、非常に不評でして、何が不評かといいますと、まず20世紀を代表するメディアはテレビじゃない、ラジオなんだということを60代以上の研究者の方が口を揃えておっしゃいました。「20世紀のメディアといっても、映像を単純にテレビで括ってはいけな、そうかラジオもあるな」ということが一つありました。あともう一つは、ナショナルメディアイベントということ語っていたんですけど、「テレビ・放送っていうのはナショナルだ」という考えが偏っていると、あなたはNHKばかりみてきたからそうなんだという意見がありました。放送っていうのはナショナルを形成していく、それを目に見える形にしていくというかたちで発展してきたし、なおかつナショナルによってコントロールされてきた。それが20世紀の変わり目に、非常に動揺していると、テレビあるいは放送の、行政レベルでも、制作レベルでも、そして番組内容でも揺れ動きつつあり、死滅しつつあると私は思ったわけです。では今日はいろんな方がおられる所で、もう一度そのあたりをここで考えてみようか、さらにラジオのことも触れましょうか、戦前のことも触れましょうかということでお話を始めさせていただきます。

ラジオ体操というのに関心をもって戦前1920年代当時のメディアを調べていく中で、ラジオ体操にまつわることを、一般の人、研究者が語っているわけですが、その中で「日本人の身体」について語っている人が多かった。明治以降の近代の私たち日本人っていうものを示す一つの例と言いますか、その

身体を通して語っている私たち日本人というのがあるのかなと思って、そういう引用をしておきました。

それは、「日本人の脳は重い」という言葉です。ラジオ体操普及の時の函館での講演会で、「ドクトル斎藤」さんが語っています。1928年に「日本人は偉い国民でありまして、世界において最も利口で、最も知識がある国民…日本人は偉いからして日清・日露戦争に勝っているのです…どうして日本人が偉い国民かと申しますと…日本人の脳髄は欧羅巴人の脳髄よりも一匁重く、支那人のに比べると二匁重くということになるのです」というようなことを言いまして、日本人を脳みそで比較している。

当時としても科学的根拠に乏しいのですが、このような言説は一般的に流布されていたものと推測されます。我々日本人がモデルとしたヨーロッパ人と比べてひけをとらない、そうありたいというのが、アジアの中では日本が優越しているという確証、それが中国人との差ということで表現されたのではないかと思います。日本人は西洋近代化以降、明治維新以降、西洋との同一化・同一視を願いつつ果たせない一方で、アジアとの差異化という言説を用いることで、西洋に近づいていこうということがあったと思います。

そこでもう一つの例として、高等女学生の富田富子さんがラジオ体操について語っている。この作文の方が、身体をストレートに語っている。「背の低い足の短い人々が醜い格好でチョコチョコ…そして日本人は他国人に比べて快活な明るさがないといってもいい…」、こういう形で日本人の身体をつづっているわけです。だからラジオ体操をして、立派な体格になって、西洋人に近づきましょうというわけなんですけど、この10代の女性がここまで身の回りにいる人たちの身体を嫌って、その理由を日本人に帰属させてしまうのは、おそらくこの人は、西洋人っていうものを活動写真や西洋絵画で見て、欧米人と、自己を含めてのごく一般の日本人とを比較して（比較する妥当性については多分考えていない）、すでに欧米人という身体モデルが彼女の中に内面化されている。私が言いたいのは、日本という国家が欧米列強にキャッチアップしたいという願望、または劣っているという気持ちを個々の身体にまで還元しているということなんです。ラジオ体操にひきつけて言いますと、基準を健康という価値達成の比較検討によって、身体そのものが劣っているんだという認識で、西洋により近づきたいという思考を繰り返していたのが当時の日本人だったということがわかるんです。

さらにそれがハッキリするものとして、「民族の祭典」とも呼ばれるベルリンオリンピックを、安岡章太郎が戦後思い出しながら語っている部分があります。【日本選手団の入場行進場面の映像流れる】「…日本の選手団の行進を見ているうちに、僕は不覚にも涙がこぼれた。野暮ったい黒のブレザー・コートに戦闘帽をかぶった小柄な選手達は、他の国の選手に比べて、あまりにも惨めに見劣りがしたからである…」(安岡章太郎『僕の昭和史1』講談社)。このビデオをみていただくと、レニ・リーフェンシュタール(記録映像を撮った監督)は、非常によく描いているんです。今アメリカ映画で描かれている奇妙な日本人、東洋人よりもよっぽど立派に描かれていると思うんですけど、安岡章太郎は西洋人と日本人の身体を比較しながら涙を流したということなんです。多くの日本人というのは、身体的劣等感を確認したのだらうと思います。欧米モデルへの接近の努力の結果がこの身体だとなれば、ますますオリンピックは勝たねばならない、リベンジの場となったわけです。

この日本人の感覚自体は戦後も変わっていない。ここでは水泳の古橋広之進、フライ級の初のチャンピオン白井義男、力道山の3人を考えてみる。この3人は欧米に身体で勝る、その私たちっていうものを、きわどいながらも確認させてくれたというのです。私たち日本人というものが、戦前の国家主義的なナショナリズムの中での日本人っていうものと、戦後を分けて考える必要があるかと言えば、個々の身体というものの、私たち日本人というものに巻き込まれていくプロセスあるいはメカニズムという側面では、戦前も戦後も変わらないと思うんです。

そこで、戦後の二大ナショナルイベントを用いて考えていきたいとおもいます。一つは皇太子御成婚、もう一つの東京オリンピックです。ここでは日本人を世界に知らせ、他者からの認定を受けるイベントであると書きましたが、日本人が主観的にそう考えたという意味で、客観的にという意味ではありません。あくまでもテレビがこう伝えた、それを見て私たち日本人が巻き込まれていったということです。

少し昔話としてこれをみていただきます。メディア天皇制と言われますけど、その中で決定的に不思議な映像があった。【上方から皇太子成婚パレードを撮影する映像流れる】ビデオカメラがある前にこれはありえないですよ。つまりこの眼差しは国民が上から見下ろしているわけです。

美智子様ですけど、【美智子妃殿下の映像流れる】この時代にアナウンサーは「美智子さん」と呼んでいます。その後に、西洋人が必ず登場する。余談ですけど、ナショナルイベントなどのお祭りには、必ず西洋人が映し出される。西洋人に評価されるということなのでしょう。私は美智子さんを子どもの頃好きだった。戦後最大のヒロインだったと思います。「この結婚は高度成長に向かう戦後日本社会の離陸を印象付けながら…」、この一言で皇室が消費可能なオブジェクトになったと言っています。

もう一つ、アエラムックの中で書いたものをレジュメ資料に載せています。毎年恒例の紅白歌合戦と、ゆく年くる年の流れの中に、日本人としての共通の時間と空間を感じていたということを書こうと思ったのです。大河ドラマ、夏の甲子園、朝の連続ドラマ、テレビの提供する全国的な番組を私たちが見て、生活部分の中で取り入れている。日本人が自然のうちに取り入れていったわけです。

全体の共通の時間と空間を最も明確に提供したのが東京オリンピックです。1964年、私はこの日のことを非常によく覚えている。この時間日本が世界の晴れ舞台になったように中学1年の私は思っていました。私はまた、ナショナルなものの中でまったく違ったものを感じていたことも事実です。個人的体験で申し訳ないんですけど、7時から行かなければならないところがあったんです。北村先生はご存知の通り、甲子園で日本シリーズ第7戦があったんです。ナショナルネットの高まってきた中で、オリンピックは待っていたイベントだったんですけど、その一方で阪神ファンだったので、南海-阪神戦がものすごく気になっていたんです。

人々がそのナショナルなものへ巻き込まれつつ、晴れ舞台に立つことを渴望していたと思いますし、その時代にメディアは非常に大きな役割を果たしていたと思います。【オリンピック映像流れる】これは市川崑監督の公式オリンピック映画です。まず広島原爆ドームから映像が入ります。戦後日本が原爆から始まるということ、ある意味でのマイナスかもしれませんが、これが自然のうちに受け入れられたということです。【オリンピックパレード映像流れる】ここで戦後の苦しいことをずっと語っています。放送50年史の文面「スポーツによって祖国の青少年を敗戦の沈滞から立ち直らせ…」において、

世界がどうオリンピックをみたかについては触れられていない。日本人にとって非常に意味のあるものであり、戦後日本の復興を世界に知らせて、跳ね返りとしてアイデンティティを再構成する場として仮定されたということなのです。

結論を申し上げますが、テレビが日本の集団的なアイデンティティを可視化する大きな役割を果たしたわけです。メディアイベントそのものを定期的にノスタルジックに繰り返して提示することによって、人々の中に記憶を収めていく。その時間に見たというよりは、メディアは定期的に提示することで、我々に共通の記憶を植えつける。メディアはそういう役割を果たしてきたと私は考えています。

---

## メディア・ビオトープ

——メディア生態系の自律的形成のために——

水 越 伸



水越：今日は北村先生の節目、ケジメの会に呼んでいただきありがとうございます。僕自身はメディアの歴史に興味を持っていて、放送論を中心にマスコミ論をやっておられた北村先生のお話をたくさん読ませてもらってきた。

黒田さんがアエラムックの中で書かれた、ゆく年くる年、朝の連ドラの話がさっきでたが、僕自身、そういうメディアの物語の中で生きてきたなと思う。こういう状況はおそらく、80年代に入ってからの技術の多様化、グローバル化の中で変わってきたのではないかと。

ところで僕は草花園芸とか生き物を育てるのが好きで、本当はそういう方面の仕事をやりたいと思っていた。現在千葉ニュータウンという里山とニュータウンの造成地が入り組んだようなところにすんでいて、ビオトープという活動に興味を持っている。今日は、このビオトープという生態学的な活動をメタファーとして用いて、ナショナルなメディアが崩れてきた中で僕達がどうしていけばいいのかを少しスケッチしていきたい。

80年代以降の日本のマスメディアの空間は崩れてきている。でも結構まだしぶとく残っているとも言えると思う。デジタル化が進んだところで、今の新聞、民放ネットワークとNHKといった構造は、そう簡単にはなくならないはずだ。たとえば90年代半ばに東京にUHF局としてはじめてメトロポリタンテレビができたとき、既存の民放や広告代理店はけっして好意的な態度は示さず、むしろ足を引っ張った。また、BSデジタル放送は、5系列の民放がそろい踏みをしている。このようなマスメディアのあり方というのは、明治以降、あるいは戦後の歴史のなかでいわば人工的に植えられ、巨大になった杉林のようなものだ。伝統的な杉林は、21世紀を迎えてもしぶとく残っている。これが日本のメディア風土というものの下地となってきたのでした。くりかえしになるが、この杉林が、人工的にできたものであることを押えておく必要がある。日本のマスメディアの生態系は、歴史社会的につくられてきた仕組みで、ある意味ではたった一世紀、あるいは半世紀しか経っていないのである。

下草や灌木のようなミドルメディアは、キー局などのメディアが立ち並ぶ中でだめになってしまう。生えるものが決まってきてしまう。市民がメディア表現をしようとしても小さいものになる。もしくはきわめて偏った思想やスタイルの「市民運動」しか生存できなくなる。そういう杉の人工林に、80年代後半からデジタル情報化という網がかかる。デジタル情報システムがどんどん浸透して、日常的なことになってきている。

このころから杉林の管理人、その業績の是非は別にして、吉田秀雄、田中角栄、前田義徳などの管理人がまったくいなくなった。里山の杉林というのは、枝や灌木を切らないと、やたら荒れていってひどい状況になってしまう。マスメディアの原理が崩れてきている。

このような状況におかれたメディアとコミュニケーションの生態系の変化においてなにか問題だったか。第一に、メディアの送り手、表現者と、受け手、消費者がまったく切り離れてしまうということだった。第二に、メディアは何らかの意味でコミュニティを生み出し、統率し、維持、発展させる機能があるといえるが、この薄暗い杉林の生態系が変化しなくなってしまった状況のなかでは、そのような機能が作動しなくなったといえる。

さて、メディア・ビオトープの説明をしておこう。

ビオトープはドイツ語で、英語で言えばバイオトポス、生物が生きている空間という意味だ。とくにドイツで環境破壊がおこったときに地域の住民が生物の生息に適した小さな場所を作っていく運動の一種であり、概念だ。日本でも最近さかんで、千葉、多摩、和歌山や三田などの大都会の郊外にあたる地域、里山が削られ、ニュータウンができるようなところにおける、一種の環境復興運動のなかでさかんに使われるようになってきた。

たとえば皆さんのまわりで小学校の校庭にカーネーションやペゴニアを植えていた庭を改造し、たくさん虫とか鳥とかが来られるような、見てくれは悪いがいろんな生物が生息できるような空間を作っていく。あるいは河川をコンクリで埋めるのではなく、元々棲息していた水草の種類を調べ、それらを植えていく。河岸には石垣を組んだり草を植えて、生き物が暮らせるあなやすきまを用意する。公園にしても意図的に廃屋みたいなものをおいて、狸が棲めるようにしたりする。こうした活動は、学校の総合的な時間の活動の一環として進められたりしはじめている。

ビオトープの仕組みを、もう少しシステムティックにみていくと4つぐらいの特色がある。

- (1) 今までの生態系の考え方と違い、小さい生態系。巨大ではなく微細な生物生態系。
- (2) 「点」ではなく、「面」、ウェブ状の空間である。一つひとつの点を、どうやってネットワークできるかということ在地域の中で考えていく。
- (3) 複合的な空間である。白神山地の原生林のように、人が踏みいってはいけない「天然」の自然などではなく、生き物も棲息し、人間が日常生活を送ることも可能なような場所である。
- (4) 自然と人工物の混在。キットやマニュアルの存在も許す。コンクリートの岸辺を樫ぎ、上から網をかけて、そこに種を埋める。その網は有機物で、後でなくなるものを使用するなど。

小さい生態系。しかも「点」だけでなく、ウェブ状になっているもので、日常の空間の延長でシステムみたいなものを考えた時に、その話ってメディアの生態系の話に重ねてもっていけないかというのが、僕のアイデアだ。明治以降の近代化、産業化の歴史のなかで巨木と化した杉の林。それらが荒れ

果てはじめると、地面が焼けて何も育ってこないということもある。私たちの市民社会に、巨木が倒れたら、すぐ蘇生するものはなかなかない。多様性のあるメディアの生態系を作る、メディア空間を作ることが望まれているのではないかと思っている。

なぜこんなことを考えたのかというと、僕が草花園芸が好きだから。あともう一つの理由は、僕はメディアの歴史の研究をしながら、メディアの現場のフィールドワークをしてきたわけだが、そのフィールドでのリアリティからだと言することができる。たとえば私たち研究者はしばしば、「欧米のメディアは多様で、日本はダメだなあ」という論法を取る。それでは日本のメディア空間をどうしていくのか。さらに現場の人や学生に「先生自身はどうするの？」って言われたときに、自分たちで生態系やビオトープをつくっていけばいいと思うようになった。

メディア論からメディア・プラクティスのほうに、メディアの実践のほうに、関心の所在が移りはじめたのだ。現在よりもよいメディアの生態系をつくっていく。そのために学問的な研究を投入していく。そのときに、さしあたりメディア・ビオトープというメタファーには有効性があるだろうと思ったのである。

ただこのメタファーには限界がある。

第一に、杉が枯れたらぺんぺん草も生えないと言ったが、けれども生物っていうのはミームというか遺伝子をもっている。ほっといても生えてくる。でもメディアとか、社会的コミュニケーションはほっといても生えてくるものではない。バイオリジカルなだけの空間、隙間とかっていうものを用意していても、どうやって住むのとか、どうやって面白いメディアを作ったり、テクニックを身に付けていくのっていう話が問題になる。

メディア・リテラシーはまさに、メディア空間のあなやすきを活用し、人々が自らのアイデンティティを見だし、多様性を維持しつつ棲息していくための営みなのだ。マスメディアの巨木を見上げて、「こいつらに騙されてはいけない」というだけの話ではない。それがメディア・リテラシーなら、マスメディア批評とかわらない。

第二に、そもそもメディアっていうものを考えるときに、メディアの裏側に張り付いているテクノロジーというものは、ごく自然に発展するようなものではない。政治や経済、イデオロギーのせめぎあいのなかで展開している。したがって情報技術を吟味し、場合によれば組み替えるようなことをしながら活用していく必要がある。それをしないで使っていると、ソフトウェアといえばエクセルとワード、インターネット・エクスプローラーと、マイクロソフトのみを覚えて使っていくようなことになる。マイクロソフトという巨木を見て、コンピューター本来の可能性ってことを考えなくなるのである。

最後に言えることは、メディアの生態系のなかで何をどういう風に回復していくつもりなのということは考える必要がある。ビオトープをつくっていくのは大変で、それには理由がある。たとえば河岸をコンクリで塗り固めた方が安上がりなのだ。そこにゆっくりと腐食していくネットを張ったり、もともとの植生を調べて、それらの植物を植えて育てていくのは、コストもかかるし、時間もかかる。5年から10年とか、それに耐えられるかということがある。元いた動物を戻してくるのは非常に難しいということは、「元々って何？」という問いにつながる。何をどう復興するかはイデオロギーをはらんだことであり、メディア・ビオトープを作る上でそのことに加担していることを忘れてはいけないのだと思

う。

僕は2000年度に東京大学に新しくできた、大学院情報学環という組織にいる。そこで社会人経験の豊富な大学院生や同僚スタッフたちと、共同研究プロジェクト「メルプロジェクト」を立ち上げた。僕もメンバーの一人で、70人くらいのメンバーがいる。高校生や、メディア現場をリタイアした人、カメラマン、市民運動の人などさまざま。多様な人に入ってもらわないと、灌木が「アオキ」だけになってしまうことになる。

今、メルプロジェクトでは、ローカル放送局と学校を結びつけて互いに学び合いながら番組をつくり、地域の放送局で流していくプロジェクト、「民放連プロジェクト」や、図書館、博物館でのワークショップなどを行っている。院生の人たちと一緒にメディア・リテラシーのカリキュラムを作って、図書館や公共施設の中で展開しているのだ。

一方でプロのジャーナリストに対し、ジャーナリスト再教育の仕掛けを作り始めている。時間がかかるし、さまざまな文化をまたぎ、新しい企てを起こすわけで、とても難しい。でもこういうコンセプトを掲げて人間を信じてやっていると、メディアの生態系が少しずつ変わっていくことがあるのではないかと考えている。ただ3年やったら変わるということはない。おそらく20年くらいやらないと何も生まれないと思う。ナショナルなメディアの瓦解を好機ととらえ、グローバルなメディアの進展を市民的な意義のあることに組み替えていく。そんなトリックスター的な試みを、じっくり進めていきたいと考えている。そのときのメディア実践の枠組みとして、本日のようなメディア・ピオトープとすることを考えているわけである。

---

## ひとつの到達点

——情報・メディア・レトリック——

北村 日出夫



北村：メディアの最も初期的なものは身体であり、発声器官であるわけですが、私自身のそのメディアが死滅しかけていまして、非常に声が出にくい。再生するには外科手術しかないと言われていまして、お聞きづらいかもしれませんが御辛抱いただきたいと思います。

私は同志社に来るまでは朝日放送で、放送の現場そのものではなく、調査や自分のところの放送の監視の仕事をしていて、制作には直接関わりませんでした。11年間いました。そのころはそれほどメディアについて考えることもなく、むしろアメリカから入ってきたマスコミュニケーション研究撰取に一生懸命であったわけです。1965年に同志社に来てからメディア

とは何かについて考えだし、ようやく見当がつきだしたのは70年代の終わりから80年代にかけてでした。メディアとはなんであるかということは簡単に答えられるものであると同時に考え出すとメディアがあとずさりしていく、そういうプロセスを踏まえながら6点ほどトピックス風に話させていただ



うと思います。

1 番目としまして、メディアというものはその普遍性と特殊性をもっていて、それはグローバルなものとなし、ナショナルなものとも言い換えられるだろうと思います。普遍性をとらえることができると同時に、日本的なメディア、文化的な場の中のメディアを考えていく必要がある。これが普遍性と特殊性ということになるかと思いますが、この二つを往復しながらメディアを考えていく必要がある。いったい日本のテレビはどういう風になってきたか、皇太子成婚パレードやオリンピックをメディアがどう伝えたかということは日本の文化や戦後の日本史の中で考えていく必要がある。同時に、テレビがなぜそういうふうに使われたのかを考えていくと、文化的歴史的要素があると同時にメディアが普遍的に持っている何かについて考えないといけない。

2 番目は、コンテンツではなくメディアを考えるということで、コンテンツすなわち内容ではなくメディア、個々のテレビ番組ではなくテレビとは何かということ、それがテレビというメディアを考えることにもつながります。

3 番目は、それではなぜコンテンツを捨象してメディアを考えるのかということなのですが、従来アメリカのマスコミュニケーション研究などで言われてきたことは、送られてきた個々の内容が受け手にどう受け取られるか、どのような効果をおよぼすか、ということなのですが、私は「内容は捨象される、つまりむしろ受け手によってつくられるものである」と考えております。私の考える情報というものは主体の中で作り出される、何かが送られてきた時点ではそれはデータでしかない。つまり行為主体の中で作り出される物が行為主体にとって初めて情報となる。「情報とは外部世界にある物ではない」という見方をとっていますので、メディアを考えるときにコンテンツではなくメディアを扱うということです。

1960 年代のおわりから 70 年代にかけて私は「情報行動」という言葉を使い始めましたが、この言葉は一般名詞化し、研究者の間で使っていただいています。しかしその場合は情報の受け取りかたの様々な行動という意味に拡大して使われていますが、私自身は情報というものは行為主体の中で作り出されるものであるという考えの中で情報行動を考えているわけです。

ついでにリテラシーに対する私の批判を付け加えておきます。もともとリテラシーとは読み書きという意味ですが、メディア・リテラシーというときの多くは書き方ではなくテレビ番組をどうしたら批判的に見ることができるのかなど、読み方、受け取りかたに限定されています。しかし情報が行動主体の中で作り出されるという考え方では、受け取りかたよりも大事なものは、表現の仕方つまりレトリックではないか。アリストテレス以来の旧式レトリックは 19 世紀に死滅したと言われていて、フランスの思想家のロラン・バルトがそのことを言いながらさらに復活させようというような試みをしています。私も 19 世紀に死滅した「文をいかに飾るか」ではなく、「いかに表現するか」という表現の技術に関わるすべてのことをレトリックと名付けたいと思っています。これがリテラシーよりも大事なのではないかと思います。これは水越さんの言われるビオトープともつながるのかなとも思いますが、私は物事をどう認識するかは、それを表現することであると考えていますのでレトリックということを積極的に取り上げ論じたいと思っています。

4 番目は、メディアというものを歴史の中でとらえるべきであるということです。これはみなさんよ

くご存じのマーシャル・マクルーハンが一貫して言ってきたわけですが、彼にならないながら私もメディアを論じるときに歴史の中でメディアを捉える必要があるだろうと思います。1983年に中野収さんと一緒に編集した『日本のテレビ文化』（有斐閣）の中でマクロのメディア史として、マクルーハンは4段階でしたが、私は時代を3段階に区分し、それぞれ口頭・手書き時代、活字時代、テレビ時代としまして、口頭・手書き時代とテレビ時代は極めて類似しているとして、また例えばタレントとスターの違いを身体の記号性と能力の記号性の違いに置き換えて述べました。また先程黒田さんが述べられたように、イベントによってテレビが生き延び、それはまさにお祭りであったわけです。ハレの日常化はケであるわけですが、ケを追い出してハレだけにしてしまったのと同時にハレとケの区別をなくしたのが、テレビというメディアであるということです。このように歴史の中で見ることで浮かび上がってくることもあるのではないかと、というふうに考えました。

5番目は、「 $n=1$ 」である、ということです。調査では母集団の総数を  $N$ 、標本を  $n$  としますが、テレビ・ラジオに関わって言えば聴取率調査・視聴率調査は一種の標本調査です。テレビの標本はあまりにも少なすぎるといことが問題になっていますが、それは統計学で議論すればよいことで、少ないとか多いとか感覚的なところで議論するのは全くナンセンスなことです。朝日放送にいたるとき、聴取率調査や視聴率調査、番組の反応調査をし、同志社に来てから調査がだんだんいやになって理屈のほうに傾斜してきました。私の調査の手ほどきをしてくれた中原勲平という人が、「北村君、調査の最高の理想形態は  $n=1$  だ」と、つまり一つだけ調べてすべてがわかる、と言ったのです。そのことで考えさせられたことは、単に調査をするというよりは、その背景の思想性を考える必要があるのではないかとということです。メディアは具体的なもので、調査をしないとわからないこともあるのですが、それでも必ずしも調査をしたからといってわかるものでもない。どういう考え方でメディアに向かっていくかということがなければ、メディア自身も自分の前に明らかになってこないのではないかと。そのときに、数さえやればいいのではなく、むしろ  $n=1$  で思想的なものを深めていくということ。社会調査そのものを否定しているのではないのですが、私自身のなかで調査してきて満足してきた面があったので、その一歩先を考える必要があるのではないかと、そこにおおげさにいえば思想性というものがあるのではないかと考え、 $n=1$  を、メディアを考えるときに目標としているわけです。

調査と理論とはいろんな分野で論争がありそれぞれの役割が言われています。最近の調査はよくわからないのですが、私が調査をしているときはいかに回収率をあげるかで四苦八苦していました。最近のNHKの調査などをみてみますと小泉内閣の支持率や自衛隊がインド洋に出たことへの支持率など、聞いてみると回収率が48パーセントというような調査を堂々と電波で流している。回収率が半分で支持する人が70パーセントであっても回答しなかった残りの50パーセントが皆反対ならば35パーセントになるわけで、ひっくりかえるわけです。そういうわけで、無回答の人の意見をいかに聞かかがこの種の調査で非常に大事なことだと私は思うのですけれども、そういう意味では余計に  $n=1$  が大事になってくるんじゃないかなと思っております。

最後の6番目は、今のことと関係があるのですが、いわゆる「役に立つ学問」と「役に立たない学問」についてです。役に立つ学問とは別の言い方では実学であり、たとえば経済学あるいは工学が実学ということになります。理論的なことでいえば、たとえば工学部と理学部の対比は実学と虚学とでもい

いでしょうか。応用科学と基礎科学という言い方もしますがどちらかといえば工学のほうが役に立つ。私は昔大学を受験するとき、京大では工学部の募集人数が一番多く入りやすいのではないかと考えて入ったのですが、一年ぐらいたってだんだんしんどくなって、特に解析学などの数学の難しいことが次々に出てきて何とか替わりたいたいと思ひ、そのうち人間について興味が出てきまして、結局文学部の心理学に替わりました。そのとき何人かの先輩に相談したことがあって、せっかく工学部に入って就職その他有利なのに就職の不利な文学部になぜ替わるのか、というふうに言われたわけですが、その考え方でいくと工学部は実学をやっていて文学部は虚学をやっているということになるろうかと思ひます。私自身は理学部が基礎科学と言ったのと同じで虚学の中の基礎的な研究、これは絶対必要だと思ひます。すぐ役に立つ応用ばかりを追いかけるより、それを支える基礎をしっかりとしないと、役に立つものばかりやっているととんでもない学問になる。たとえば御用学者という悪口がありますが、これはすぐ役に立つ学問をやる人になる危険性がある。実学と虚学ということを考えてときに、私は、あえて虚学を選ぶべきではないか。これはいかにメディアが具体的な社会現象であってもそれを考えるときに虚学的な部分がある。メディアとは何であるかを掘り下げて考えてみる必要があるのではないのか。というわけで実学と虚学ということが水越さんの言われるメディア実践を好意的にとらえるならばそういうふうにとらえたい。それは水越さんも賛成していただけるのではないかと思うのですが。

以上そういうことでメディアのとらえかたにしぼってききましたが、私は1965年以降そういう形で考えてきました。ところが先ほど紹介していただいた『テレビ・メディアの記号学』を1985年に書いてから後自分自身進歩してないな、16年間新しい考え方を提出できなかったなと思っております。ただ見方を変えて同じことを見ることはある程度あったのですが新しい発想、概念を投げかけることはできなかった。しかし幸せなことに、いろんな場面で多くの若い人たちと話をする機会もっていました。若い人たちとコミュニケーションしながら自分の研究を若い人のフィルターにかけていくことが大事なんじゃないかなというふうにも思っております。私自身はなぜか結果的にメディアというものをずっと一貫して考えてきて、その周辺に記号、意味、情報の問題が広がっていったと思っております。

---

## ディスカッション

---



**岡田：**ナショナルなものが衰退・変容してきているというお話がありましたが、マスメディアが変容・衰退し、メディアが分散・マイクロ化した後、今後そのナショナルなものに代わるものがあるのか。新しいメディアの中にそれらは再生しうるのか、あるいは別の形のメディア・イベントがありうるのでしょうか。

**黒田：**ナショナルな話をしましたのは、テレビが日本人を描いていない、というのがあったんですが、メディアが描かないというよりは私たち日本人がそういうものを必要としなくなりつつあった。メディアがその大きなイ

ベントの中で今あせているんです。多くの視聴者を動員するのにどうもっていったらいいか。だから無理やりナショナリズムを声高に語ってオリンピックなどで人を引き入れようとするけれど、なかなかうまくいかない。それはコマーシャリズムだけじゃなくて、愛子ちゃんが生まれたのに視聴率が上がらない。オリンピックでは、選手の家族の物語を設定する。ですからナショナルというものが漠然とした中で、でも何かわからない、安心のできる「私たち」を表現する。それが私のもう一つのテーマである関西論なんですけど、内なる他者として関西を描く、その中で周辺としての関西人でない私たちを日常的にメディアは描いているのではないかと。明確なナショナルであるということを我々日本人は求めなくなってきているんですが、そこで今ワールドカップ日本代表への熱狂は何だろうということというのが私の関心の的なんです。私たちが90分間に熱狂するナショナルとは何だろうか。もうひとつは、インターネット時代にメディアが別のアイデンティティ・スペースをどういう形で作るのか。これは面白いテーマだと思うのですが、私たちの空間としてのアイデンティティ・スペースが、どういう形でメディアがどう背負っていくかが関心のあるテーマです。それが次の質問にもつながるんですが、メディア・リテラシーの問題です。あえて今日ナショナルという問題をぶつけたのは、北村先生が常にメディア・リテラシーの問題で、ある種強制力を持った正しい読みが制度化されていくということに対する不快感を示されていて、そこを水越さんはどう切り返すのか、ということが今日の隠れた楽しみだったんですが。

**岡田：**メディア・ビोटープのお話がありましたが、生態学的な視点でたとえば杉林が荒れていってどうするのか、ということですが、しかし荒れ果てたままでも生態系は生態系であり、メディアの場合もあるがままの姿があるのではないかと。というのは、ある種インターネットでいうと「2ちゃんねる」的な無法地帯の生態系があるがままであるのかもしれない。そこに秩序があるのかないのかを見るのは、背景にあるイデオロギーや思想である。日本のメディアの背後にある思想やイデオロギーがくずれていくとどうなるのか、あるがままではどうまずいのかをお聞きしたいと思います。

**水越：**メディアの生態系にあるがままの姿があるのか。それは逆に言えばあらまほしき生態系は想定しているのか。岡田さんの提示された疑問は、このような問いをはらんでいるのだと思う。そしてそのことは、おそらくメディア・リテラシーで正しいメディアの見方はあるのかという問いに関係してくる。僕はどちらかというと混沌が好きでカウンター・カルチャー系なので、まずは「そんなもんねえよ」と言いたい。ただし今の日本のメディアの生態系のなかで、若者文化やカウンター・カルチャーからでてくる新しい動きを、ただ「自然に」現れた動きとしてとらえ、その可能性を好意的に見ていくというだけでは足りないのではないかと。それはこれまでの若者文化論などと変わらない態度ではないかと思う。

メディアの研究は、何らかの意味で私たちが生きるメディアの生態系をよりよいものに組み替えていくという実践的な努力に結びつかなければならないというふうに、僕は思っている。かつてステュアート・ホールが皮肉を言ったことがある。「日本人でカルチュラル・スタディーズをやっているロンドンに来ている人はみんなアニメとかポピュラーカルチャーをやっている、それを適当にジェンダーやオリエンタリズムやアイデンティティに結びつけているけれど、古典的な階級や隠された差別のようなハー

ドな問題に結びつけてないじゃないか、なんでなんだ」って僕に言ったことがある。どうも日本のメディア文化研究には、そう言うふわふわしたところがあるのではないか。ジェンダーをやっているのにエスニシティのことは全然気にしてないとか、メディアはわかっているけどポリティークなどはわかっていないとか。

あるがままの、理想的なメディアの生態系などはたしかにない。里山は自然だというけれど、もっとはるか古代には、無秩序な自然があった。話が飛躍するが、「2ちゃんねる」は、植物でいえばしたたかな藤蔓（ふじつる）じゃないか。藤蔓が蔓延するのは、それはそれである段階の生態系の位相だととらえることができるだろう。注意してほしいのは、僕がいう杉林の荒れ方というのはそんなレベルじゃないということだ。あまりにも長い間杉林、つまりマスメディアしかなく、その下に藤蔓も灌木も、下草も生えてこなかったのだから、たとえ杉の木が枯れても、その下になにも育たないと言うような状態のことをいっている。ぜひ実際に里山に行ってそんな状態をみてほしい。蔓がからんで杉が死んだり締め上げたりその間からいろんなものが入ってくるといった多様性を孕んだ「荒れ果てる」ということは、まさにビオトープの目指すところだ。

いずれにしても何らかの意志を持って、メディアの生態系に働きかけることをしていかなければならないと思う。「2ちゃんねる」は非常に面白いが、やはりあの空間を設定したプロデューサーがいて、一種のデザインが施されている。あるがままの自然というのはさっきもいったように想定することができない。あらゆるメディアのアクティビティーに意図があったりイデオロギーがあるということを考えていく必要があると思う。

実学の危うさは、ある意味で現場からいらっしやった北村先生だからこそよくおわかりのはずで、まったくそのとおりだと思う。いわゆる経営学、マーケティングなどそういう意味での実学が持ついいところもあると思うんだけど、同時に限界や問題点もある。大学院の社会人教育をやっていくときに MBA のコースみたいなものをサクサク作り、学位を供給していくような、そういう実学には批判や思想が希薄だ。

しかしそのような意味での実学ではない実践というのは想定されるべきではないだろうか。実践をすることは大変なことだ。それは現実と向き合ったり、関わらなければならないから、いつか現実に飲み込まれたり、状況に負けてしまうようなことがあるかもしれないという予感がする。でも5年で負けるのはくやしいうでやっぱり20年ぐらいいはそれをしていくような体力とデザインみたいなものを身につけていきたい。僕は、しんどいけれど実践の中で虚学というか、思想や批判に目覚めるというようなことをしていかなければならないと思う。

いずれにしてもそのときの実践というのは単なる実学というのとは決定的に違っている。それはおそらく北村先生が最初のほうの項目で下敷きにされているプラグマティズムの持っている、先生に合わせていけば、行為の発生するところに意味ができるということ。僕に言わせれば実践の中にはじめて理論が意味を持つということがあると思う。やっぱり実践のリアリティの中にないとその考えるべきことも価値を持たない。実学でなくて実践的な営み。僕はそれを志向している。

レトリックの話を聞いて思い出したが、僕自身、ロラン・バルトが好きだった。そういうことを実践の中にいると忘れちゃう。僕がメディア・リテラシーを考えるとときには、はじめから正しいメディアの

読みというところからは入らなかった。僕は今のメディアのしくみを変えていったり、「関節はずし」をしたり、そこに新しい場所を設営していくような発想の一つとしてメディア・リテラシーがあると思っていたんで、僕が言っているリテラシーの話には表現と受容と操作みたいなのが練り合わさった形というものがはじめからある。

それは英米系のメディア・リテラシーとは、出自や経緯が違っている。僕はそれでいいと思っている。今のメディア・リテラシーの持っている実学的、啓蒙的な傾向っていうのはやっぱり乗り越えていかなければならない。しかし一方で一般的なメディア研究において、理論と実践の往復運動を展開するうえでも、メディア・リテラシー活動は有効だ。だから表現なり遊びみたいなものがメディア・リテラシーに入っていく必要があると思っている。

それからたとえば学校とマスメディアをつなぐとなると、マスメディアも学校も戦後体制の中で制度として成り立っているから、そうそう巧くゲリラ的な活動はできないで、容易に啓蒙的な話に回収されるようなときもある。北村先生が出されたレトリックというキーワードは、そうした困難な状況を克服する一つの道筋を示してくれるような予感がする。いずれにしても僕は「文系の創造知」というものがあると思う。それは批判や思想や歴史が練りこまれた形であると思うが、一方で現場というより実践のようなものとうまく循環運動をしながら理論なり主張を練り上げていけたらいいなと思っている。

**会場①：**ナショナルアイデンティティが基本的にそれ自体で作上げられていくという点が非常に面白かったんです。黒田先生のレジュメの図の中で日本の西欧の同一化というふうに書かれているんですが、たとえば日本とアメリカとの関係とアイデンティティの問題のようなものを教えていただきたいと思いました。

**黒田：**そのことは身体の問題で西洋への憧れで説明したとおりなんですが、もう一つ追加するとすれば逆に日本がアジアとの差異化の中でわれわれを確認してきたという、それは今のメディアの中で明確な形で語られなくなっている。だからこそ偽装アジア、偽装混沌、偽装無秩序、偽装不道徳としての関西人がメディアの中で設定されているんだというのが私の論なんですが、いかがですか。面白くないですか。アメリカ映画の中でアフガニスタン系の人が好き勝手に喋っているときに字幕が大阪弁だったりするわけですね。

もうひとつ、さきほどのカルチュラル・スタディーズに対する皮肉は半分私にもむけられているなと。今の問題もちょっと含めて言いますとメディアの中では階級の問題というのは非常に隠蔽されやすい。それがまた上手な形で大阪人として階級の問題が語られたりするということがあるんじゃないか、と思います。ナショナルなものを語ることで日本における階級の問題が隠蔽されるのは確かだと思います。

**会場②：**水越先生のおっしゃったメディア・ビोटープので、杉林の蔓のように巻いていって崩壊させていく、からみついていくというお話がありました。マスメディアという権力に対して日常生活の中で一般の人々が共同体を形成してそれで意見を言っていくということはあると思いますが、一般の人々とい

うのはアクティブではあるけれども、やはり権力の前ではパワフルではない状況があると思います。マスメディアに対する「2ちゃんねる」のBBSなど、メディアの二項対立的なものに疑問を感じました。日常空間、家庭の中でテレビやパソコン、携帯電話などのメディアを使っていますが、たとえば「2ちゃんねる」BBSで何かを語るにしても結局はマスメディアからの情報をもとにして意見をいうという構造もあるのではないのでしょうか。

**水越：**マスメディアは朝日やTBSのような規模のものだけではない。たとえば、僕らがつきあってるテレビ信州は正社員数が100人不足、夕方のワイドニュースに記者が数名しかいない。たしかにマスメディアといってもひと括りに考えるべきではない。規模や地域、歴史によって多様性がある。同じことは数百万部の本と数百部の本がある出版でもいえる。

メディア・ビオトープの実践は、マスメディア対市民メディアといった二項対立でものごとをとらえるのではなく、メディアの生態系を構成する樹木や灌木、草花の多様性を確保し、展開させていくことにある。ただし、朝日とかNHKとかいった、ナショナル・メディアと付き合っていると、ときどき二項対立的に心底怒りたくなってくる。たとえば戦犯女性法廷の問題などは、そうした怒りの一つの例だろう。国家的なマスメディアの暴力を目の当たりにすると、二項対立的なものの方で対抗していくという力を、完全に相対化したり、無効だとは思えなくなるときもある。

**黒田：**僕はメディア・ビオトープはあんまりあてにしてなかったんです。でも今日の水越さんの元気な発言なんか見ていると、なにかついていきたくなる。メディアにおける運動が僕とはちょうど一回り違うなあと。僕なんか70年代はじめにNHK受信料不払い運動とかアクセス運動とかやって簡単に負けて、それに比べると非常にしなやかにやってはるなど。簡単に巨木を倒したり、巨木の中に入りこんでやってやるうって感じじゃないので、上の世代から見て、なるほどなと感じました。

**水越：**今の話で思い出したが、マスメディアを向こう側にしてさっき僕が言ったようなかたちで怒ることも大事だが、一方でNHKや朝日の中にはいい人もいっぱいいることを忘れてはならない。そういう人たちを取り込んで、NHKという巨木に穴を空けていくみたいな戦略もあるだろう。やっぱりマスメディアの現場でも市民運動の現場でもこの人だよな、みたいな人がいるものだ。そういう人たちがビオトープの中心になっていかに多様性を保ちつつ展開していくかということが大事で、そういう意味ではおっしゃるとおり権力だからと考えると多分自分たちの活動の範囲を狭めていくと思う。

僕から北村先生に質問を。簡単に答えていただけるかどうかかわからないが、一つはなぜ朝日放送から同志社にいらしたんですか。歴史的文脈がおありになるのかなと思う。

また、僕は三重県の桑名の生まれで関西と中京のはざかい、辺境にいたが、東京や千葉での生活が長くて、関西にくと北村先生や黒田さんにお会いしたりして一種のビオトープっぽいアカデミック・コミュニティがあることを感じる。北村先生はそれらを切り盛りされてきたわけだが、昔と今でどうかわったか、あるいは変わってないのかというところを少しお聞きしたいと思う。

北村：話のつながりで言うと水越さんの最初の話で、「私は絶望している」ということを前提にお話になり、「でも5年で負けたくない」とベシミスティックな言い方でおっしゃっていました。けど基本的にはオプティミストだなと思います。ということでなぜ朝日放送から同志社にきたかにつながってくる。つまり私自身は朝日放送で労働組合をして、組合がなかったので地下組織を作ってはじめて労働協定の専従協定をとったときの専従書記長で、1年間会社を離れていました。そして、民放労連の副委員長もしました。その中で素晴らしい人たちと出会ったんですけど、一緒にやった多くの人たちは会社の幹部になりました。彼らがそうなったときにどういうビヘイビアをするか、ある意味「存在は意識を決定する」の言葉どおりいくらいい人でも資本の論理にとり込まれざるをえないということがある。ここあたりはある程度見極めながら私自身もベシミストで批判しながらも粘り強くする。すると水越さんのやりかたはたしかないだろう。その時に何が必要かという実学よりは虚学じゃないかなと。つまりベシミストに必要なのは虚学だと。朝日放送をやめる直前から民間放送の合理化がどんどん進行しまして、私は調査のほうをやっていたんですけど、民放が非常に儲かっていた時期でしたので調査のお金が極めて潤沢でしたが、合理化がどんどん進んで、だんだん息苦しくなってきたところに、たまたま同志社から誘いがあり半年考えましたが見切りをつけたわけです。

2番目は黒田さんの研究テーマとも完全に重なっている関西なんですけど、私は関西というのをそれほど意識していなくてしょっちゅう自分から東京の研究会のほうに出さしてもらったりして、そんなに違いは感じていなかったんです。ただ昔から言われているように、関西にいと、世界中の情報がどうしても東京に先に入り、ワンクッションおいて関西に来るので、じっくり考えることができる。東京はとにかく新しい世界中の、私流に言えば、データを追いかけてばかりいなくてはいけない。そういうワン





クッションおいたところで研究会なりをするというメリットはそれなりにあるんじゃないか、そういうところが関西のよさではないか。また東京の飲み屋は、ここは法政の人が来る店だ、ここは東大の人が来る店だと、お店によって住み分けがあるんですが、関西の飲み屋はかなり異分野の人、異なる大学の人がいっしょに「わいわい」やっている。その中で私も耳学問をさせてもらいました。

**黒田：**北村先生、今は退職されましたが関学の津金澤聰廣先生、関大の井上宏先生という関西のマスコミ御三家といわれている方々は3人とも関西のマスコミの現場出身で、現場感覚をもたれてやられているんですね。この御三家の指導は関西のある種の特徴になってるんじゃないでしょうか。

(先生方の敬称は略させていただきました)

#### シンポジウム参加者の紹介

黒田 勇 (関西大学社会学部教授)

水越 伸 (東京大学大学院情報学環助教授)

北村日出夫 (同志社大学文学部教授)

岡田 朋之 (関西大学総合情報学部助教授)